

Shape your world


Ritsumeikan
Asia Pacific University

データのリアルタイムな可視化・活用で留学生募集業務を高度化

入学から卒業後まで学生を一貫支援するエンロールマネジメントを実現

約 1 年

パートナー企業による構築支援とトレーニングで
職員約100名が利用可能に

立命館アジア太平洋大学

<https://www.apu.ac.jp>

Shape your world


Ritsumeikan
Asia Pacific University

業 種：教育

学生・教職員数：学生5,691名（2022年11月1日時点）、専任教員175名・職員226名（2022年5月1日時点）

所在地：大分県別府市十文字原1-1

事業内容：2000年4月、学校法人立命館により創設。「自由・平和・ヒューマニティ」「国際相互理解」「アジア太平洋の未来創造」を基本理念とする国際大学で、開学以来、163の国・地域から国際学生を受け入れている。学部としてアジア太平洋学部と国際経営学部、大学院としてアジア太平洋研究科と経営管理研究科を設置し、合計約5,700名の学生を擁する（2022年度）。2023年4月には新学部としてサステイナビリティ観光学部を開設。

導入前の課題

留学生関連データが学内に散在し募集業務改善に活用できず

大学運営上、留学生募集は重要な業務だが、関連するデータが各部局・システムでバラバラに管理されていたため可視化・連携されず、募集活動の改善等に活用できなかった。また、大学運営全般においてデータを見て意思決定する意識が低かった。

解決策

データの一元化とリアルタイムな可視化で募集業務を改善

Tableau導入と同時にデータウェアハウスを整備してデータを一元化。留学生の募集活動や出願の実績・推移がリアルタイムに可視化され、分析結果を改善策につなげられるようになった。また、各種データをかけ合わせた多様な分析が可能になった。

導入後の効果

エンロールマネジメントの実現、意思決定・施策実行までの時間短縮

留学生募集業務の効率化・高度化に加え、大学IRでの活用も進み、エンロールマネジメントなどが可能になりつつある。さらに大学運営の議論等において、データによる評価という要素が必須のものとなり、意思決定・施策実行までの時間が短縮されるなどの効果が出ている。

選定理由

圧倒的な見やすさと使いやすさ、二言語対応を高く評価

業務に関わる全職員の利用を前提としていたため、ユーザーの関心を惹くビジュアルの見やすさ、各自でカスタマイズして分析するプロセスのわかりやすさを重視。また、日本語・英語のどちらにも対応している点も評価した。

導入時期：2020年4月

導入製品：Tableau

ライセンス数：100

主な利用環境：学長室（IR）、アドミッションズ・オフィス（国際）、スチューデント・オフィスで利用中

導入に要した期間：約1年

お客様プロフィール



お名前：浅野 昭人 様

役 職：副学長 事務局長 学校法人立命館常務理事

主な担当業務：学校法人立命館の常務理事、立命館アジア太平洋大学の総務財務担当副学長・事務局長として、立命館アジア太平洋大学を新たなステージへ導く改革の先頭に立ち推進している。

導入の背景

データを可視化・連携できず、 留学生募集の効率化・高度化が課題に

大分県の別府湾を一望できる高台に広大なキャンパスを構える立命館アジア太平洋大学（APU）は、2000年に設立された、日本初といわれる本格的な国際大学です。その位置づけにふさわしく、2022年度、同大学に在籍する学生約5,700名の約半数は、世界102の国・地域からの国際学生です。また、教員の半数近くが外国籍で、日本語・英語の二言語教育システムを展開するという、世界的にもユニークな多文化・多言語環境を確立しています。

当然、同大学の運営において、募集活動をはじめとする留学生関

連の業務とシステムは重要な位置を占めています。国・地域・学校別の受験者・入学者の数や推移、入試・入学後の成績などのデータを踏まえ、募集活動や入試・審査をどう改善するか。世界中どこからでも受験・入学の手続きを円滑に行えるプラットフォームをいかに整備するか。それらは大学経営の根幹に関わるテーマです。

同時にその領域は、同大学にとって長年の課題でもあった、と副学長の浅野昭人氏は話します。

「本学では毎年、どの国・地域・学校から何名が出願して、入試において何点で合格し、その後どんな成績を収めたか、という数千名分のデータが蓄積されていきます。しかし、各データはそれぞれ異なる部局やシステムでExcel等を使って管理され、データの収集・整備・分析は個々のスキルに依存していました。結果として、

Q1. Tableau で感動したことは？

A1. 圧倒的な見やすさと使いやすさ

ビジュアルの圧倒的な見やすさと、ツールとしての使いやすさですね。それから、出願状況などの日々更新されるデータをメールで自動配信する機能は、便利なだけでなく、関係教職員にツールをより身近に感じてもらえるという意味でも重宝しています。

Q2. Tableau 導入後の変化は？

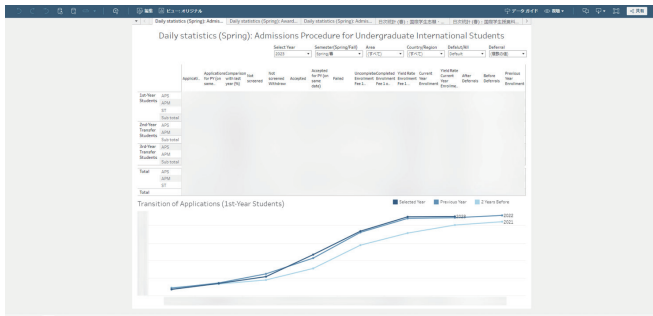
A2. 意思決定におけるデータドリブン思考の浸透

学内で議論をする際、データというものが根拠としてなくてはならない存在になっています。役職者を含め、データにもとづいて意思決定するという思考が根づいてきているという実感があります。

Q3. Tableau でもっとしたいことは？

A3. 活用範囲および教員・学生ユーザーの拡大

活用範囲をさらに拡大したいと考えています。現状、一部の教員や学生はかなり高いレベルで使いこなしていますが、より多くの教員・学生に使って欲しいので、データサイエンス等の授業でアウトプットのツールとして活用してもらえるよう、教員とも相談しています。



国際学生志願者数および手続状況（日次）

各データを連携・分析してすぐに留学生募集や大学IRに活用する、というレベルにはまったく達していませんでした。また、大学というのは基本的に1年間単位で物事が進む仕組みのため、データを踏まえてなにかを改善しようと思っても早くて再来年度、ということになりがちです。そうすると、判断基準はどうしても感覚的なものになり、そのときどきのデータを見て迅速に意思決定するという意識は総じて低かったと思います」

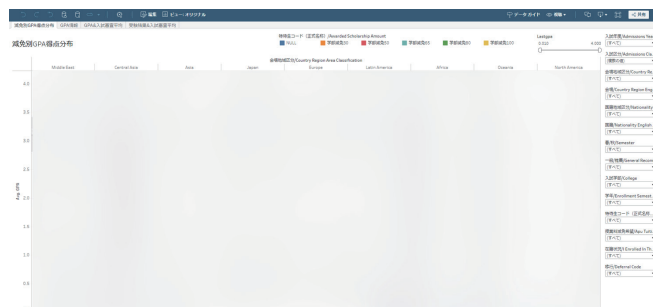
Tableau 導入・運用環境

各種データの可視化・連携で
募集活動等の業務を改善

そうした課題の克服に向け、同大学は2018年、各種データを可視化・分析し、留学生関連の業務を効率化・高度化するツールとして、アドミッションズ・オフィス（国際）へのTableauの導入を決定。パートナー企業による構築支援とトレーニングを受け、約1年で職員約100名が利用できる状態にまでこぎつけました。

Tableauによってまず大きく変わったのは、留学生の募集活動における職員の取り組み状況や出願状況の実績・推移がリアルタイムに可視化され、関係教職員に自動配信されるようになったことです。

「毎日更新される出願者のデータや各国・地域・学校別の職員の活動状況、前年度・目標値との差異などをひと目で把握できるよ



授業料減免率別入学後 GPA 分布

うになり、たとえば出願数の伸び悩んでいる国・地域に対するマーケティング施策を強化するなど、格段にマネジメントしやすくなりました」

また、募集・入試関連のデータをSalesforceや基幹システムのデータと接続することで、これまでできなかった多様な分析を瞬時に試行できるようになりました。

「たとえば、出願時に書かれた小論文の内容に剽窃等の不正がないか、過去の小論文との類似度を調べるなどの分析を簡単に実行できます。中でも大きく進歩したのは、入試時の得点のデータと入学後の成績のデータをかけ合わせた分析を行えるようになったこと。入試時とその後の成績を比較して奨学金の配分を決める、国・地域・学校・年度別の成績の傾向から入試の選抜が適切かを判断するなど、さまざまな施策が可能となっています」

Tableau 選定の理由

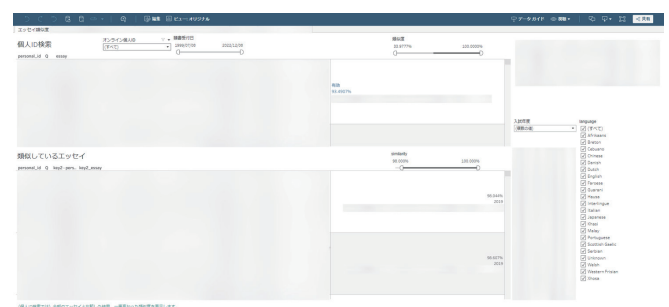
圧倒的な見やすさと使いやすさ、
二言語対応が決め手

パートナー企業とのミーティングにおいてTableauの活用についての話題で盛り上がり、その場でアドミッションズ・オフィス（国際）への導入を決めたという同大学。決め手となったのはビジュアルの見やすさと使いやすさだったそうです。

「BIツールについては業務に関わる人すべてに使ってもらいたいと考えていました。Tableauなら、圧倒的に見やすいビジュアルでユーザーの関心を惹きますし、自分なりにカスタマイズしてデータ分析するプロセスもわかりやすいので、大丈夫だろうと思ったのです」

加えてもうひとつ、同大学ならではの選定ポイントとなったのが、日本語と英語どちらも利用できることです。

「本学には留学生が多いため、二言語教育だけでなく、受験・入学のプラットフォームなどもすべて日本語・英語の両方で使えるようにしています。国産のBIツールの多くは日本語ベースなので、



出願書類（エッセイ）の類似度調査

英語版を作るときの使い勝手が悪そうでしたが、Tableauは日本語・英語のどちらにも対応しているので、その点でも本学には最適だと思いました」

Tableau 導入の効果

学生の学びの実態を把握し支援する エンロールマネジメントが可能に

同大学では、データ分析の結果を学内の業務改善や意志決定につなげる大学IRの領域においても、Tableauの利用を進めています。もともと学長室では、アドミッションズ・オフィス（国際）より早い2013年にTableauを導入していたものの、思うように活用できていなかったそうです。その背景には、前述の通り各種データが部局ごとに管理され、連携されていないという状況がありました。

「今回のTableau導入を機にデータウェアハウスを整備してデータを一元化したことによって、大学IRにおいてもTableauをさまざまなことに利用できるようになりました。中でも特にやりたいと考えていたのが、エンロールマネジメント。学生一人ひとりについて、入学前の成績から入試、入学後の成績、課外活動、卒業後の進路までの全データをつなげて見ることで、学びの実態を把握して学生支援や授業設計に結びつける、というマネジメント手法です。大学という教育機関の目的に照らすと非常に大事な施策である一方、実現のハードルは高いのですが、本学では可能になりつつあります。コロナ禍になる前にそういうステージへ進むことができてよかったと思っています」

浅野氏は、大学運営全般においてもTableau導入の効果を実感している、と話します。

「意思決定の際、データによる評価という要素が必ず加わるようになりました。それによって説得力が増し、最終的な意思決定や施策実行までの時間が短縮される、会議の回数が減る、という効果は確実に始まっています。大学という組織ではとにかく多くの会議が行われるので、Tableauの影響は非常に大きいと思います」

今後の展開について

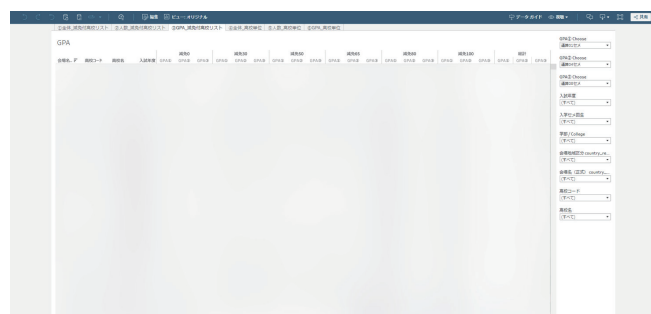
活用拡大のカギは、データを行動につなげる “思考”を持つ人材の育成

同大学におけるTableauの活用は日々拡大、進化しています。世界各地で開かれる留学生募集の説明会における活用もそのひとつです。

「2019年までに職員が約40か国へ出張し、世界中の大学が集う説明会に参加していました。その際、海外の大学の多くが、まさにTableauのようなツールの画面を使って説明するのにに対し、われわれが見せるのは大量に持参したパンフレットなどの印刷物。そうなるともう説得力がまるで違って、レベルの差を痛感していました。近年はコロナ禍のためオンライン開催ですが、次回こそTableauを使って他大学に引けを取らないプレゼンを行える、逆に差をつけるチャンスだと楽しみにしています」

ただ、Tableauの今後の活用は、データドリブン思考を持つ人材をどれだけ育てられるかにかかっている、と浅野氏はいいます。

「データを駆使するスキル以上に、データから具体的なアクションを起こそうとする思考を身につけることが大切だと感じています。現在、Tableauの利用は職員業務がメインですが、今後、授業などにも領域を拡大したいと考えています。教員・学生にも利用が広がれば、データから得られる気づきはその分だけ多くなります。それを皆で持ち寄ることで、よりよい施策や改善につなげられるようになる、と期待しています」



高校・授業料減免率別入学後 GPA 調査

無料トライアル版をダウンロードして、ぜひ Tableau をお試しください。

<http://www.tableau.com/ja-jp/trial>

株式会社セールスフォース・ジャパン Tableau 事業統括